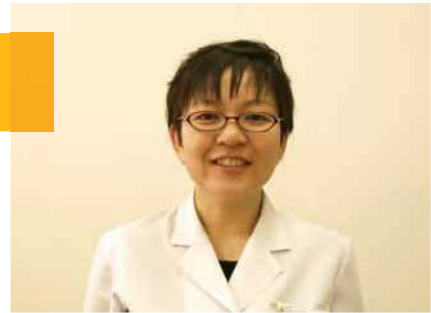


在宅薬剤師『やまね』の訪問日記

第3回

株式会社ファーマシイ 山根暁子



薬剤師によるフィジカルアセスメントの是非について、たくさんの意見を聞く。現場で働く一薬剤師としては、目的と手技が正しいのであるならば、薬効副作用の確認の精度を上げるために文明の利器は利用させてほしいと考える。医療人の一員である薬剤師として、「やりたい」というよりは、「当然するべき義務」という思いがある。尊敬する同胞たちは皆、寸暇を惜しんでアセスメントスキルを磨き、副作用発現未然回避など、確かな成果もあがってきている。ただ、社会に対して「ぜひ、させてください」と要求するには目的と手技について確かな裏づけが必要であり、今の自分がその点で胸を張れるかという正直、語尾が小さくなっていく。継続した訓練と、分析能力の精度アップが喫緊の課題だ。

また、私は、「薬学知識、医療知識の本領発揮のためのフィジカルアセスメント」という大なる命題の手前に「医療者と患者のコミュニケーションツールとしてのフィジカルアセスメント」も感じている。後者が主ではなくあくまで付帯価値と理解したうえで、今の多くの薬剤師にとっての必要性を実感している。

とても心に残る経験がある。

だんだんと筋肉が萎縮し筋力低下をきたし、呼吸不全などで死にいたる神経難病であるALS（筋萎縮性側索硬化症）の患者さんがいた。年齢は80歳代。出会ったときにはすでに呼吸状態が悪化し始めていた。リビングウィルで人工呼吸器の造設は希望されず、呼吸苦の緩和を望まれた。意思の疎通は目線とかすかな口の動きで。わずかなコミュニケーションではあるが、こんなふうに歳をとりたい、死が近づいてもこんなふ

うに生きていと思わせてくださる、とてもチャーミングな方だった。不安を和らげたいという娘さんの要望で、ケアチームみんなで集合写真を撮って、それを枕元に飾ってくださっていた。しんどいときも、写真を見てドクターやスタッフの顔を思い出すと安心して楽になることがあるのだそう。日に日に増していく呼吸苦の中で薬物治療も難渋した。苦しくて不安で、ドクターに緊急往診依頼があると、ドクターから私の携帯に電話が入り、薬の緊急配達になる。ドクターと入れ違いに訪問し緊急の薬を使い、効果は見られるか、急性の副作用が現れることはないか、しばらく患者さんの枕元ですごす。呼吸は落ち着いたようだが、患者さんの眉間のしわが深かった。「ドクターが来る前よりは楽そうだけど、不安みたい。握り締めているから手が真っ白なんです」と、娘さんも心配そうだった。

パルスオキシメーターを取り出し、「体の中の酸素を測ってみましようか？」と提案した。握りしめていたこぶしをほどき、しばらく握手をしてから指先に測定器をつける。酸素飽和度は97%。ドクターのまねをして「100点中の97点、しっかり酸素が体をまわっていますよ」と伝えると、患者さんの眉間がふっとゆるみ、笑顔を見せた。それを見て娘さんにもっこりしてくださった。手の中の測定器に心の中で「Good Job!」と言った。指先での酸素飽和度測定が、議論されているフィジカルアセスメントにあたるかどうかはいったん棚上げて、患者さんと家族の不安のケアをあのと看破かに測定器が果たした。そして、手を握るという行為をケアの延長線上でとても自然に薬剤師が行い、わずかながらもプラスの成果を体験できたのである。